

## 津軽地方における林業労務者

松 田 奈 津 子

青森県はク山をみたら国有林と思えクといわれるほど国有林が多い。総面積の43%に当る415000haも森林である。全国的にみると青森をトップに北海道、東北各県と続く。なぜこのように国の北にだけかたまっているかと不信に思う。明治初年藩有林と社寺有林が政府に引きつがれて、本県のように中央差遣のところでははっきりした事情もつかめないでいるうちにこのような形態で現在に残っているという。県内でも南部地方は民有林が多いが、特に下北、津軽地方は国有率が大きくほとんどの町村が総面積の60%以上の高率をしめしている。津軽地方は旧津軽藩有林を継承したものである。その歴史をたどると津軽藩がいかに林政に力をそそいだか、その当時の林政管理職の身分的段階をみてもよくわかる。それが現在津軽一帯のすばらしい森林帯をつくっている。だが所有の面では私の叙述の及ぶところではないし、沢山の問題が残されている。

この偉大な森林群の中に働く人々の生活は長時間の重筋肉労働と不安定な出来高制度の下におかれているということが指摘されるし、特に津軽地方は根強くのこっているのである。

最近林業でも機械化が著しく進み、従来の「手挽鋸」「人力木寄」「牛馬車、馬ぞり」といった作業方式に変わり「動力鋸」「集材機」「作業軌道」という新しいシステムが採用された。それ物語るように弘前営林署では昭和33年～昭和40年の間に機械導入が二倍にふくれ上りそれに比して労務者が約 $\frac{1}{3}$ 程減少して来ている。だが以前として伐採量は年々ふえる一方である。ここで労働者は1つの転機に来ている。しかし作業方式が変化し伐採量が増しても、国有林やその他の林業の中では一般的にみられる封建的労働機構は以前として残っているのである。

まず国有林に働く労働者は大ざっぱに分けて定員内職員、常勤作業員、常用作業員、定期作業員、月雇作業員、日雇作業員の6種に大別される。これらの中で身分的に保障されているのは「定員」「常勤」「常用」だけである。一方世間的には「デカンショ暮らし」といわれながらも毎冬決って失業させられる労働者（定期39.2%、月雇18.2%、日雇26.6%、8.39年弘前営林署）は実に弘前周辺だけで84%を占めている。青森県は出稼ぎ県として紙面ににぎわしているが失業保険が年間約10億円も落ちているということは単に季節的出稼ぎにばかりその原因を追求できない。国有林事業は目標達成、経済節約が至上命令となっているので過剰人員はすぐに失業し、保険で生活しなければならない。これらの失業させられる労働者は身分的保障は何一つない不安定なものである。

次にその賃金形態をみると出来高払いで杣夫、バチひき、集材機などそれぞれ違っている。

一人一人には格付賃金がついていて出来高の賃金が格付によって按分される。彼らは一日750円で働き月収約2万500円であると計算されるが実際はクどんぶり勘定で食費、道具費その他をさしひかれて手もとには1万6000円～1万5000円しか残らないのである。これで家族がその生活をささえるというみじめなものである。

彼らの賃金は他の産業と比較すると平均日賃金が584円で林業従事者が862円とたかい率を示しているが、月間現金給与額をみると平均26500円であるのに林業従事は21000円と低くなっていることも特異な現象である。いかに出来高制、どんぶり勘定が不動なものとして残っているかがうかがわれる。

国有林のはらい下げをうけた民間会社の請負制度は個人で機械を持ち込み仕事をするので高賃金であるが長時間（平均10～11時間）働くためそれだけ危険率が多く発生件数も普通の林業労働者の2倍以上となっている。彼らの仕事は今までは冬山が主体であったものが夏場への転向がぐんとふえたために、自家営業の農業の時期とぶつかるということが大きなやみである。

彼らの中には国有林労働者以上に、きびしい賃金形態の差異が「飯場制」「組頭制」の中に残っている。その仕事のリーダーをつとめるものが村の有力者であるがため、こうぜんと賃金の割引きがかかるのが常識となっている。ここにも封建的な大きなしこりが残っている。

津軽の林業がいかに豊かで将来性の有望なものであっても、作業の近代化が急速に進歩してもこの封建的な労働機構のなくならないちは極の両端を歩いているにすぎない

津軽地方の人々の底を流れている後進性がわかるような気がする。